

事業原簿（ファクトシート）

作成日：平成26年4月1日作成
更新時期：平成27年3月 現在

制度・施策名称					
事業名称	学術・産業技術俯瞰システム開発プロジェクト	PJコード：P13014			
推進部	イノベーション推進部				
事業概要	<p>研究・技術開発のグローバル化、細分化・専門化に伴い、科学技術の進展、変化は加速度的に生じており、研究開発プロジェクトの立案時のみならず、実施時においても常に国内外の技術動向等をモニタリングし、研究開発項目や体制の構築及び柔軟な見直しを行うことが求められている。</p> <p>本事業では、計量文献学等の手法を活用しつつ、学術論文や特許情報等の様々な情報から、将来的に成長領域となりうる技術領域（萌芽領域）や萌芽領域に関連の深い技術領域、あるいは萌芽領域における有望な研究者及びそのグループを自動特定するシステムの開発を行う。</p>				
事業の位置づけ・必要性について	<p>グローバルな研究開発動向の把握に際し、学術論文や特許情報等の情報は爆発的に増大している状況にあることから、情報技術を用いた論文等の書誌情報の分析を活用することが注目されており、書誌情報の分析手法に関する研究開発が、米国や欧州だけでなく、韓国や台湾等のアジア各国においても実施されている。</p> <p>我が国においても、大学や公的研究機関等において、論文等の情報をもとに学術俯瞰マップの作成及び関連技法の開発が行われているが、更なる普及と有効活用を図るためには、新たな分析手法の開拓も含め、信頼性・精度・有用性を確保した実用的なシステム構築を行う必要がある。</p> <p>こうした分析精度の向上により、企業や公的研究機関等の実用に供するとともに、NEDOの技術開発プロジェクトや政府のイノベーション政策、企業の技術経営戦略の立案にも貢献するシステム利用が可能となる。</p>				
事業の目標	<p>本事業においては、</p> <p>研究開発項目①「萌芽領域の自動特定技術の開発」</p> <p>研究開発項目②「関連領域の自動特定技術の開発」</p> <p>研究開発項目③「有力・有望研究者及び共同研究体制の自動特定技術の開発」</p> <p>の3項目を中心に開発する自動特定技術をベースに、萌芽領域等の高精度の特定化やイノベーションに関する有用な情報抽出・構造化を可能とする「学術・産業技術俯瞰システム」を構築し、その有効性、有用性、実用性を上げることにより、国内の政府機関や公的研究機関、企業等における政策立案や経営戦略策定に資するよう実効性を高める。</p>				
事業規模	事業期間：平成25年度～平成29年度				
	契約等種別：委託				
	勘定区分：一般 [単位：百万円]				
		HY25年度 (実績)	HY26年度 (予定)	HY27-29年度 (予定)	合計
	予算額	50	50	150	250
	執行額	28			

情勢変化への対応	—
評価に関する事項	<p>評価時期及び方法（外部評価又は内部評価、レビュー方法、評価類型）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎年度評価：内部評価 ・ 期中評価：平成27年度、外部評価 ・ 事後評価：平成30年度、外部評価
事業成果について	<p>平成25年度は、研究開発項目①「萌芽領域の自動特定技術の開発」を実施。任意の技術領域を萌芽領域と非萌芽領域とに分類し、それぞれに関する特徴量を抽出した。それら抽出した特徴量を分析することにより、萌芽領域を自動特定する予測モデルを構築した。また、予測モデルにより特定した萌芽領域の新規性・妥当性について、当該領域の専門家等による評価結果を予測モデルにフィードバックし、萌芽領域を約80%の制度で予測できる成果を得た。</p>

平成 25 年度 事業評価書

平成 27 年 5 月 21 日作成

制度・施策名称	—	
事業名称	学術・産業技術俯瞰システム開発プロジェクト	PJコード：P13014
推進部	イノベーション推進部	
総合評価	<p>平成 25 年度は、3 つの研究開発項目のうち、萌芽領域の自動特定技術の開発を行い、萌芽領域を約 80 % の精度で予測できる基盤技術の開発に到達した。本基盤技術は毎年爆発的に増加する論文数に対応でき、得られた成果によって、萌芽領域を系統的に、より早期に特定できる見込みも得られた。今後も研究開発項目②、③の領域をカバーしていくことで更なる成果向上が期待できる。</p>	
評価詳細	<p>1. 必要性（社会・経済的意義、目的の妥当性）</p> <p>研究・技術開発のグローバル化、細分化・専門化に伴い、科学技術の進展、変化が加速度的に生じている昨今において、学術論文や特許情報等の様々な情報から将来的に成長領域となり得る技術領域や有望な研究者及びそのグループを自動特定するシステムの開発は、社会・経済的意義や目的妥当性の観点からも妥当と判断できる。</p>	
	<p>2. 効率性（事業計画、実施体制、費用対効果）</p> <p>平成 25 年度においては、当初想定よりも少額の予算で、萌芽領域の自動特定について約 80 % の精度予測を達成できたことは、十分な費用対効果をあげたものと評価できる。</p>	
	<p>3. 有効性（目標達成度、社会・経済への貢献度）</p> <p>平成 25 年度においては、予測モデルにより特定した萌芽領域の新規性・妥当性について、当該領域の専門家等による評価結果の予測モデルへのフィードバックを行い、萌芽領域を約 80 % の精度で予測できる成果を得たことで、今後研究開発を継続することによる成果向上が期待できる。</p>	
	<p>4. その他の観点</p> <p>特になし</p>	